

コロナの時代を生き抜く

岐阜地区教化センター長 近藤 龍麿

まずアンパンマンとバイキンマンの話から始めます。

アンパンマンとバイキンマンは敵ですが、実はアンパンマンだってイースト菌がないとつくれません。世の中からはばい菌がなくなればいいのか、というところははいかない。ばい菌がいなくなると、人間も生きていけなくなる。人間はつねにばい菌やウイルスと常に戦いながらそれで免疫ができ、ともに生きてきたといえます。バイキンマンもアンパンマンも菌がないと生きていけないし、この体にもビフィズス菌などのたくさんの菌がいます。人類の戦いに明け暮れた歴史の真逆とともに生きてきたという歴史が知らず知らず自分の体の中にも刻み込まれていたのだということを感じます。

このアンパンマンとバイキンマンのお話から二人の真宗を生きた人を思い出します。親鸞聖人と蓮如上人、このお二人は生きておられたころの環境は違えども伝染病や災害に幾度となくあわれています。その中でお二人ともその都度、さて私はどうすればいいのかと自分の立ち位置の中で考え行動を起こしておられます。特に蓮如上人は『お文』という我々門徒衆へのお手紙の中に「疫癘」というものを書き残されています。延徳^{えんとく}2年といえますから蓮如上人78歳、1492年の春から夏にかけて伝染病の大流行というのがあったと書かれていますし、思いのほかたくさんの人がなくなっていかれたとあります。

この頃、大阪は堺の地にとどまっておられた蓮如上人は、伝染病が原因で死ぬのではなく、生まれたときから決まっている寿命のご縁が切れたということですから、そんなに驚かなくてもいいですよと、そのように仰っています。が、しかし、伝染病で死ぬという人間の行いと無関係に亡くなっていくことに不安とおののきで苦しんでおられた門徒衆や、伝染病に振り回されておられた堺の地の人々にも向き合い、さて、私はどうすればいいのか、その思いに揺れながら、疫癘というお手紙をつくり読み聞かせられておられたといたします。

ただ念仏ひとつで阿弥陀にたすけられていくという教えに最後までぶれることのなかった親鸞・蓮如お二人の念仏者の生きざまがコロナの時代を生き抜く我々のヒントになるように感じています。

疫癘というお手紙は『お文』の四帖目九通にあります。目を通していただければと思います。